

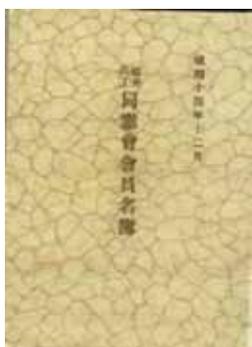
# 福井大学工業会 100年の歩み



初代 伊藤 義朗 (M2)  
(1938 ~ 1940)

竹内 隆 (A2)  
伊藤 義朗 (M2)  
山田治之助 (M3)  
竹内 久正 (D2)  
武田文之助 (D2)  
池田 秀二 (T3)  
中島 与作 (T5)

1938年3月「同窓会」  
発起人7名



「福井高工 同窓會會員名簿」  
1939 (昭和14)年12月



「福井高工 同窓會會員名簿」  
1944 (昭和19)年10月

## ■「同窓会」：母校—卒業生—地域を結ぶコミュニティ

同窓会 (Alumni Association) とは、一つの学び舎にさまざまな機縁で集った同世代の学生たちが、キャンパスでの多くの共通体験を得ながらそれぞれに学び成長して卒業した後、その共通体験をかけがえのない「絆」として大切にしていくことを卒業生として願い、再び集い合う世代を超えた緩やかなコミュニティを意味する。さらに母校への愛から卒業生は、母校と地域社会を結ぶ懸け橋となって急速な時代変化に柔軟に対応しながら、母校の発展のために変わらぬ努力を惜しまない。福井大学工学部の同窓会、すなわち現在の「工業会」が、かかる目的のもとで如何なる軌跡を辿ってきたのか、これからの前途のために纏めておきたい。

## ■1938年の設立経緯と初代理事長・伊藤義朗

福井大学工学部の母体・福井高等工業学校は、初代校長に關盛治を迎えて関東大震災直後の混乱期に1923 (大正12)年12月10日付にて創立し、翌年4月10日の入学式で95名 (建築A35・機械M30・紡織T20・色染D10) の新入生を迎え入れて3年制のキャンパス生活が始まった。關校長の下、建築の坂部保治と機械の金尾忠義、紡織の吉田喜一、色染の立木勝蔵らの専門教員によって第1期生に相応しい人間力と専門力が厳しく教育されたことから、1927 (昭和2)年3月10日の第1回卒業式で61名 (A22・M16・T16・D7) のみ実社会に巣立つことが許された。その後の卒業生と比べ、母校の礎となる1期生は特別であったようである。

そして5年後の卒業生は450名を超え、全国各地から「同窓会」設立の声が度々出て来たものの、初代校長・關盛治は反対の立場を最後まで貫いた。關が父親のように熱く語る「植木鉢の松よりも、深山の松であって欲しい」との願いから、学校の歴史はまだ浅く、馴れ合いの集団をつくるよりも、実社会で独り生き抜く人間力と専門力の向上を優先すべきという厳しい姿勢であったと伝えられている。この初代校長の意志を2代校長となった前田復三も受け継ぎ、創立から10年経っても同窓会の設立は実現しなかった。

ところが1933年の關の逝去に続いて1937年に前田が急逝し、その葬儀にあたって全国にわたる卒業生の連絡が取れないことに困惑した第一期生7名らが、3代校長の太田代唯六に懇願したところ即時に快諾されたことから、漸く「福井高工同窓会」が1938 (昭和13)年3月6日に設立するに至った。この時、卒業生は約1,200人にもなり、その発起人7名の中から初代理事長の伊藤義朗が選出された。そして翌年12月に文庫本サイズの『同窓會會員名簿』が初めて発刊され、また講堂2階の「御真影奉安室」新設が母校への支援事業の始まりとなった。こうして学科を超えた卒業生の会員相互の繋がりと母校との連携協力が徐々に強化され、同窓会の組織づくりが着実に進んでいった。ところがアジア太平洋戦争の拡大にともなって卒業生も続々と戦地へ送られ、敗戦末期

の1944年10月に纏まった粗末な装幀の『同窓會會員名簿』には、死亡欄や空白が目立つものの、卒業生にとって母校と同窓生を繋いでくれる大切な心強い「証」であったに違いない。



2代 竹内 久正 (D2)  
(1940～1966)

### ■戦後の新制大学とともに「工業会」へ：2代・竹内久正

戦中から終戦にかけての過酷な状況下で同窓会の存続に尽力した人物こそ、2代理事長の竹内久正であった。竹内を中心とした同窓会役員は、戦後すぐに会員の生存確認を実施して名簿作成のために奔走し、1948年4月に『福井工業専門学校同窓會會員名簿』（戦時中に校名変更）が編集発刊できたものの、数多い死亡や空白欄が当時の哀切な現実を静かに物語る。新制大学スタート直後の1950年に同窓会は「工業会」に改名すると、地元福井の戦後復興のために母校と地域の連携を促した結果、1952年の「福井復興博（通称：繊維博）」開催と、翌1953年の産官学協働の原点となる「繊維工業研究所」設置、そして1965年には全国的に最大規模となった工学部の「大学院」設置に及ぶ多大な経済支援と継続的な貢献を行ってきた。



3代 黒川 誠一 (M10)  
(1966～2000)

### ■全国の支部体制と工学部50周年：3代・黒川誠一

1966年から3代理事長・黒川誠一のもとで6,000名を超える同窓生のため、全国「支部」組織が徐々に体制強化され、母校との多様な連携も活発化した。特に1974年の工学部創立50周年記念事業として大部の『福井大学工学部五十年史』発刊と、正門横にケヤキの植樹を行った。そのケヤキはクスノキの古木とともにキャンパス入口の固有な風景を創り出している。さらに1980年の「日下部・グリフィス学術文化交流基金」創設、1992年の「地域共同研究センター」発足、1993年の「大学院博士課程」設置などに尽力した。また1995年1月「工業会シンボルマーク」募集の結果、川端正英氏（M57）の作品が選ばれたのである。



4代 川上 英男 (A28)  
(2000～2014)

### ■工学部90周年から100周年へ：4代・川上英男と5代・堀照夫

21世紀の新時代を迎えた2000年には同窓生16,000余名となり、4代理事長に就いた大学一期生の川上英男は、まず前年の大学創立50周年記念事業の「アカデミーホール」建設に取り組んだ。これに続く2002年の「総合研究棟」竣工、2003年の「プロジェクトX 福井大学版」企画スタート、2003-04年の「大学統合」と「大学法人化」、2007年の「産官学連携本部」設置、そして2014年の「工学部創立90周年」記念事業として「初代校長・關盛治胸像」再建や「關盛治著『工業教育一家言』」復刊などが精力的に成し遂げられた。



5代 堀 照夫 (D44)  
(2014～現在)

そして5代理事長・堀照夫の就任時には、同窓生22,000人を超えて工業会は全国10支部の組織となった。これ以降の特記事業として、＜大学ホームカミングデー2015＞の「行われなかった卒業式（昭和47・52年：工学部、教育学部）」、2017年から工学部生・院生への活動支援「工業会奨励賞」「海外渡航助成」、2018年の「大学同窓経営者の会」発足など数多い。そして先の90周年記念を起点として2023年に「工学部創立100周年」を迎えるための記念事業準備が進められ、2023年12月9日に記念祝賀会が盛大に開催されたのであり、2024年7月20日には記念式典が予定されている。そして工業会は、新たな一歩を踏み出すことになる。

## 参考文献

- 藤田 正 (T4) 「同窓会が設立せられるまで」北冥 第25号 (1938/5)  
竹内久正 (D2) 「三十年を回顧して」福井大学工業会々報 第8号 (1957/12)  
藤田 正 (T4) 「むかしばなし」福井大学工業会誌 第18号 (1967/3)  
澤崎吉太夫 (M17) 「福井大学工業会の歴史」福井大学工業会誌 第39号 (1988/4)



会報合本1冊 (A4版)  
福井工業会会報 (新聞状)  
第3号 (1950/6)  
福井大学工業会報 (新聞状)  
第5号 (1956/1)  
～第13号 (1963/4)

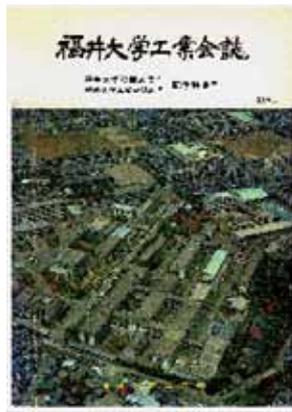
## ■ 卒業生と母校の絆を物語る機関誌：「会報」から「会誌」へ

1938年の設立から終戦の1945年までに同窓会による『名簿』が2度 (1938, 1944) 作成されたことは既に紹介したが、機関誌は発刊されておらず、母校創立時からの校友会誌『北冥』がその役割を担っていた。そして終戦直後から新聞状の「会報」が発刊され、その第3号と第5号～第13号が現存しており、合本1冊に纏められている。さらに第14号からB5版冊子状の「会誌」(表紙揮毫：吉田宏彦／建築学科教授・工学部長、第30号より表紙カラー印刷) となり、さらに第50号を機にA4版冊子へ拡大され、現在の年1回発行の編集形式が定着した。卒業生と母校の近況報告の場であり、その深い絆を物語る貴重な歴史資料でもある。

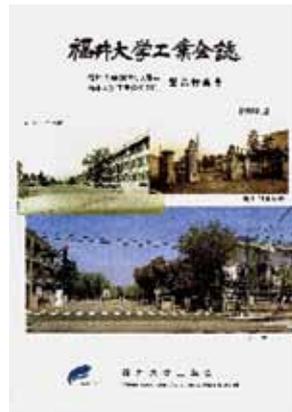
これまでの主な表紙を紹介します。



第26号 1975



第30号 1979



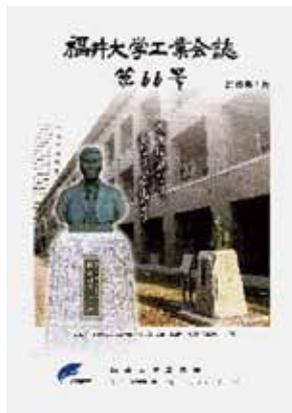
第50号 1999



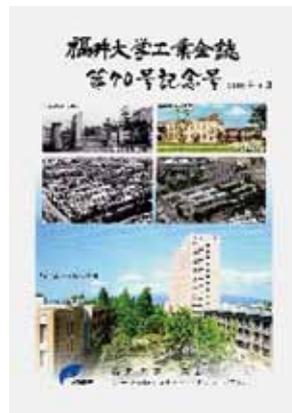
第60号 2009



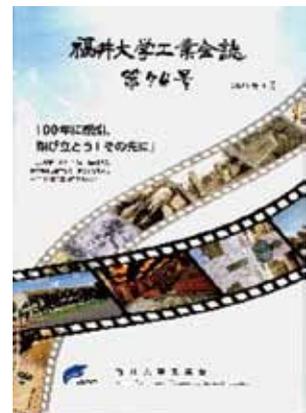
第65号 2014



第66号 2015



第70号 2019



第74号 2023